

書 評

筑 木 一 郎

倉田 敬子 著

学術情報流通とオープンアクセス

勁草書房, 2007.8
196p 22cm 定価2,600円(税別)
ISBN 978-4-326-00032-6

学術情報流通, 学術コミュニケーション, オープンアクセス。ここ数年図書館界を席捲してきた話題であり, だがそうでありながら, 現場の図書館からかけ離れた, どこか遠い国での出来事のように感じられる言葉でもある。しかし, 本書を読めば, これらの言葉や概念が実際には私たちの日常や仕事の現場に深く入り込み, 実はすでに私たちをこれまでとは違う地平へと連れていってしまっているのだということが理解できるであろう。

学術研究活動は知識の生産を目指す社会的営為であり, そのためには学術情報を流通させるシステム, つまり学術コミュニケーションが必須である。その学術コミュニケーションの世界はこの10年ほど「電子化」の洗礼を受け, 大転換を遂げている(ように見える)。本書は, 学術コミュニケーション研究を牽引してきた著者が, この世界の基本構造と電子環境下における変容の実態を明らかにするものである。

第I部 学術コミュニケーションとは

第1章 情報メディアから見る学術コミュニケーション

第2章 学術情報の特性と学術情報流通モデル

第II部 印刷物による学術コミュニケーション

第3章 学術雑誌

第4章 学術論文の機能と構成

第III部 学術情報流通の変容

第5章 電子ジャーナル

第6章 オープンアクセスとは何か

まず, 第I部で著者は, 従来の学術コミュニケーション研究のアプローチを概観した上で, 「情報メディア」の観点という新しいアプローチを提案する。情報メディア概念は, 情報が生産, 流通, 利用される際の物理的媒体であり, 同時に技術的に可能な手段であるだけでなく社会的に広く利用され, 実際に

コミュニケーションを実現させる社会的なシステムとして具現化されていること, また情報の送り手と受け手が共有している一種の文法(ディスコース)を持つことといった観点から規定される。

次に, 著者は, 学術情報流通の古典的モデルと電子環境下におけるモデルの変容に焦点を当てる。古典的モデルでは, 学術情報の流通はモノの流通のアナロジーで考えられてきた。それが, 電子メディアの登場・普及を経験することにより, コミュニケーションの社会的相互作用の場として捉えなおそうとする視点の展開を迎えた。ここでポイントは, 新しい技術の導入が即決定的な要因となるような技術決定論は取らず, 新しい技術が社会的にどのように受け入れられ, その技術の特性や制約によってコミュニケーションがどのように変容し, 逆に社会的な要請や制度によって技術がどのような展開を見せるのかといった, 相互作用の視点をもって分析を進めるとしている点であろう。

さて, こうした情報メディアという切り口から見た場合, 学術コミュニケーションはどのような新しい風景を見せるのだろうか? 第II部では, 学術雑誌とは何か, 学術論文とは何なのか, という根源的な問いを情報メディアの観点から説き起こしている。

学術雑誌については, 物理的属性と社会的システムの面からその本質に迫っている。学術雑誌は歴史的にどのような機能を果たしてきたのか, どのような制度を形成してきたのか, 印刷版学術雑誌はどのように流通してきたのか, といった点について基礎の基礎から分析を加えている。その中で, 登録・認証・報知・保存という学術コミュニケーションに不可欠な機能を学術雑誌は集中して果たしていることを明らかにし, また, ポイントとなる質の保障制度である査読制(ピアレビュー)の機能を兼ね備えていること, 商業出版社と大学図書館を主なプレイヤーとする流通体制が形成されてきた道程等も明らかにされる。

学術論文については, ディスコースの面から考察される。学術論文は送り手と受け手の間で了解され, 高度に定式化された独自の構成や表現形式を持っている。著者は, 学術論文の構成を細かく検討することで, 学術論文が持つ機能, こうした規範的形式によって学術論文が著者や編集者, そして読者の間で知識のあるべき姿として立ち上がってくる社会的文脈を浮かび上がらせる。

第Ⅲ部では、電子化を一大契機として訪れた学術情報流通の変容に焦点を当てる。中でも、著者は、今や学術コミュニケーションの中心となった電子ジャーナルと、現在学術コミュニケーション変革の中心的な考え方となっているオープンアクセスに特に注目し検討を加えている。

電子ジャーナルについては、前章での印刷版学術雑誌と同様、物理的属性と社会システムの面から、電子ジャーナルの基本的特性や流通・提供の仕組みを分析している。その際、中心的な課題は、印刷メディアから電子メディアへと移行していく中で何が変化し何が変化しなかったのか、これまで数々あった学術雑誌の変革の試みの中で唯一電子ジャーナルのみがどうして成功したのか、といった点である。分析の中で、電子ジャーナルの主流はそれまで確固たる地位を占めていた既存の印刷版学術雑誌の電子版であること、商業出版社の主導により、投稿・編集・査読など研究者が関与する行動範囲についてはほぼそれまでの制度を維持したまま、流通の局面のみを変革することによって成功を収めたことが次第に明らかとなる。

一方で、電子ジャーナルとは異なる方向性で注目を集めているのが、オープンアクセスの理念を核とする各種の動きである。自らの研究成果をできるだけ広く知らしめたいとする研究者の根源的な欲求を核として、学術情報の利用に障壁がないような仕組みを作り出そうとする試みは、研究者コミュニティの宣言から始まり、オープンアクセス雑誌の刊行、セルフアーカイブの実践、機関リポジトリの運営と様々な実践に結びついている。著者は、それぞれの試みを、その背景や前史から丁寧に文脈を解きほぐしている。オープンアクセスの試みが既存の学術雑誌に代替するような地位を占めるかどうかは今後の展開次第といえる。ただ、機関リポジトリ運営の現場にいる評者としては、オープンアクセスは学術雑誌の代替的存在というよりはむしろ相互補完的な機能を果し、より豊かな学術情報流通を実現させるものという実感を抱いている。

本書は、図書館情報学の立場から学術コミュニケーションの本質と変革を追及した研究書であるが、その成果は研究の世界だけのものではない。大学図書館の現場も、本書の成果から読み取り活かしていくべきものはたくさんあるだろう。

第一に、図書館とは直接関係のない部分も含めて、

学術コミュニケーションの基本構造を改めて理解する必要がある。本書は、非常に丁寧に学術コミュニケーションの基本構造を解体し私たちにを見せてくれている。評者はこの数年激動する学術コミュニケーションの動向を追ってきたが、しかしその前提となる学術雑誌の歴史的な位置付けや学術論文の機能といった基本的な点を押さえていたわけではない。本書は、こうした評者のような、分かったつもりになっている現場の人間にこそ読まれるべき作品といえる。

第二に、学術コミュニケーションの認識のパラダイム転換を現場の図書館も共有する必要がある。学術情報流通のモデルはモノの流れのアナロジーからコミュニケーションの場へと変化した。図書館は伝統的にはモノの集積地という役割を明示的に果たしてきたが、このパラダイム転換を受けて、モノの集積地という役割を越えて、情報の結節点となり、またコミュニケーションを実現させる場として機能することが求められている。このことは、単に扱うモノが印刷メディアから電子メディアに変わったというだけではない。電子ジャーナルにしる機関リポジトリにしる、電子メディアによる学術情報流通の場合、図書館に情報が集まってくる必然性や図書館が常に介在している必然性は実はない。そうであれば、私たち図書館の現場は、この電子メディアによる学術コミュニケーションに関わり続けるために、明確にコミュニケーションの場におけるプレイヤーとしての認識を持ち、積極的な行動を戦略的にとっていかねばならないだろう。

学術研究活動は常にラディカルであり、学術コミュニケーションの在り方も常に最適解を求めて模索され続ける。本書の機能論的な分析を敷衍すれば、学術コミュニケーションに必要な4要素(登録・認証・報知・保存)が保たれるなら、学術情報の流通に学術雑誌というパッケージを取る必然性もなく、大学図書館や出版社が介在する必然性も理論的にはない。学術論文のディスコースが組み替えられる可能性すら常に孕まれている。そのような世界の中で、大学図書館は学術コミュニケーションにどのような付加価値を与えて自らを参入させ続けることができるのか、そのことが試される時代へと突入している。やや深読みかもしれないが、そういった認識の地平へと連れていってくれること、それこそが本書の醍醐味といえるのではないだろうか。

(つづき いちろう 京都大学附属図書館)